

クレイグ・ジェフリー著／佐々木宏、押川文子、南出和余、小原優貴、  
針塚瑞樹共訳

## 『インド地方都市における教育と階級の再生産 —高学歴失業青年のエスノグラフィー—』

(明石書店、2014年)

山ノ内裕子

本書は、イギリスの若手文化人類学者、クレイグ・ジェフリーによって書かれた、インド北西部のウツタル・プラデーシュ州メーラト県メーラト市の二つの大学を舞台とするエスノグラフィー（民族誌）である。著者は、ピエール・ブルデューのハビトゥス論を批判的に援用しつつも、レイモンド・ウィリアムズやポール・ウィリスなど、英国バーミンガム学派のカルチュラル・スタディーズの文化理論に依拠して、「ジャート」と呼ばれるメーラトの富農たちが、急激な社会的経済的变化を生き抜くために行った経済戦略と子どもたちへ対して行った教育戦略、そして大学進学を果たした下層ミドルクラス二世代の息子たちがキャンパスの中で行う様々な政治的戦略を、下層ミドルクラスの人々による社会的再生産を生き抜くための創造的実践として描いている。本書の構成は以下の通りであるが、それぞれの章には、各章の内容を表す、極めて独創的なタイトルがつけられている。

第1章 インドは待っている

第2章 「フィールド」を耕す—農村中間層の台頭と適応—

第3章 タイムパス—人生の交差点—

第4章 学生の集会的異議申し立て

第5章 将来をジュガールする—即興のポリティクス—

結論

インドでは、1960年代から1970年代にかけて、農業に対する政府の補助金と農業技術の革新を足がかりにして富農層が誕生した。本書に登場するメーラ

---

(やまのうち・ゆうこ 関西大学)

ト県のジャートもそうした富農層に含まれる。彼らは出身カーストで言えば、中間カーストに分類されるが、インド社会においては、経済的に豊かになったとはいえ、下層ミドルクラスである。

しかし、1980年代半ば、インド政府は財政危機と債務国からの圧力によって、経済自由化政策に着手。その結果、政府の補助金や公務員のポストが削減され、教育や保健に関する公的サービスが縮小し、1990年代終わりまでに大都市に住む上層ミドルクラスと下層ミドルクラスの間には、大きな溝が生まれた。上層ミドルクラスは経済自由化の恩恵を受けることができたが、下層ミドルクラスは、後述するように文化資本の欠如により、十分に満足しうる教育環境や安定した雇用機会を得ることができなかった。加えて、下位カースト層の地位向上と、ダリト（元不可触民）および下位カースト出身のエリートの台頭によって、下層ミドルクラスの立場は、上下から挟まれさらに不安定となった。

本書に登場するのは、ジャートを中心とする、この下層ミドルクラスの青年たちである。農業外活動の多角化によって経済的に豊かになったジャートの親たちは、ローカルポリティクスへの投資の強化に加え、子ども達に流暢な英語と高い学歴をつけさせるべく、幼少期から学費の高い都市部の私立学校へ進学させる。なぜなら、子どもたちへの教育投資は、息子たちが大学卒業後、公務員として雇用されることを通して、あるいは娘たちが、良家に嫁ぐことによって、親たち自身が農業以外の分野で経済利益を拡大することを可能とするからある。「息子は元本、孫は利子、曾孫は複利」という常套句が富農たちの間でしばしば聞かれるそうだが、親たちが教育投資への見返りとして思い描くのは、公務員として雇用されている親孝行で働き者の息子と、有力なコネクションをもつ都市家庭に嫁ぐ娘である。

親たちの教育戦略が奏功し、息子たちはメーラト県の中心にあるメーラト市にて、高等教育を受けることが可能となった。インドでは、近年、高等教育の大衆化が進み、若者の大学進学率も上昇している。しかし、大学の大衆化にともない、大学においては、ソフト面・ハード面の双方において教育の質が低下し、学生たちの勉強は、学期末の試験に備えてただ、教科書を丸暗記するだけのものになってしまった。大学に入るまでは、寸暇を惜しんで勉強したのに、大学入学後は、チャイ屋で暇つぶしをしつつ、学期末試験が来るのを「待つ」だけ

なのである。

また、大学に進学しても、上層ミドルクラス以上の学生が有している文化資本、すなわち身体化された富裕層特有のハビトゥス（たとえば、洗練された雰囲気や、訛りのないアクセント）のような文化資本、そして、就職に有利な社会関係資本を持たない下層ミドルクラスの彼らは、卒業後、公務員などの安定した職に就くことができない。つまり、上層ミドルクラス以上の者との間には、分厚い「ガラスの天井」が存在するのである。とはいえ、大卒としてのプライドから、田舎に帰って親の農業を継ぐことにも抵抗がある。そのため、ジャートの息子たちは、大学卒業後、別の学部や修士課程へ進学して複数の学位を取得したり、不安定で長期的な見通しが持てないばかりか賃金も低い、パートタイムの仕事に就いたりして、安定した公務員職にありつけるのを「待つ」のである。

このように、メーラトの町では、大学での勉強に失望し、そして卒業後も将来のあてがなく、ただひたすら時間が過ぎるのをやり過ごす、下層ミドルクラス青年たちが少なくない。著者は、彼らの「待つこと（ウェイティング）」の様相を、「リンボ」「タイムパス」という、メーラトで用いられる二つの概念を用いて説明する。

リンボとは「地獄の辺土」、すなわち、「忘れられた、あるいは無視された人や物が留め置かれる場」(p.13)を指す。これに対して、タイムパスとは、インドでは一般に、仕事の合間の余暇や休息時間を指す概念であるが、著者は、若者たちがいうところの「タイムパス」を、「近代的」とされる空間からの排除を示す概念として用いている。だが著者は、下層ミドルクラスの高学歴失業青年たちが経験するタイムパスを、英国のバーミンガム学派の知見に重ねて、「社会的困難を表現しているだけではなく、何か別の、おそらく文化的政治的実践」(p.156)と捉えている。すなわち、リンボの状態に置かれた若者たちのタイムパスこそ、メーラトの下層ミドルクラス男子学生に自己肯定感をもたらす文化的実践なのである。

タイムパスはまた、ジェンダー的实践でもある。高学歴失業青年たちは、タイムパスの経験によって、荒っぽい男らしさを獲得する。ユーモアや皮肉に富むタイムパスは、カーストや階級といった社会的区別を超えて、男子学生たち

が連帯する実践である。同様に「リンボ」の経験も、「不遜な若者文化だけでなく、どこか創造的で悪意のある集団の政治的活動を生成する」(p.170)と著者は述べている。このように、タイムパスやリンボといった「待つ」経験こそ、メーラトの下層ミドルクラス男子学生たちの紐帯となる。

インドでは、日本でもかつてそうであったように、大学が若者の政治運動の重要な場として機能している。大学は出自を異にする若者たちを近づけ、他者について学ぶ機会を提供すると同時に、自身の生活について政治的理解を深めるように促す場なのだ。また、学生時代は、社会批判に自由に取り組むことができる時期でもある。

インドの学生たちは、高等教育の不適切な管理体制と、リンボの状態にあるという自らの境遇に対する憤りから、しばしば集会的異議申し立てを行う。それも、カーストや階級の境界線を越えて学生たちは連帯し、キャンパス内のコラプションとたたかうのである。著者は学生活動家たちを、(1) 中間カーストの「社会改革者」集団 (2) 「リーダー」または「政治家」と自認し、すでにまたはこれから大学内で学生政治に関与する政治活動家集団 (3) 政治志向のダリトとムスリム (4) 上層ミドルクラス出身で、学生運動に際して情報と資金の提供を行う学生活動家たちの4つに分類している。

これらの4グループは、必ずしも一致した政治的見解を持っているわけではない。しかし、学生活動家たちは、学生たち間で共有された教育の劣化と失業という経験から、(1) 学費の高騰 (2) コラプション (3) 進級・卒業の妨害 (4) ハラスメントという、多様な出自の学生たちを動員しうる4つの論点を導き出していた。こうして学生活動家たちは、自らの出身カーストや出身階級の学生たちを動員し、大学当局に対して一斉抗議行動を行うのである。本書では、実際に起こった学内でのコラプションを事例として、学生たちが連帯して異議申し立てを行う様子をエスノグラフィックに描いている。

だが、驚いたことに、こうした抗議行動の一方で、学生組織の学生リーダーに選ばれた者の中には、政府や大学の役人たちと共謀してコラプションを行う者もいる。学生たちを煽って大学教職員を批判する激しい政治キャンペーンを展開する一方で、個人的な収入のために彼らと結託しているという、まさに二重取引を行っているのである。彼らは自らを「フィクサー」とであると認め、学

生組織におけるリーダーとしての特権的地位を利用して個人的利益を得ている。他人からこの二重取引を非難されても、ものともしない。むしろ、ジャートのフィクサーたちは、「自分たちの二枚舌を<創造的な即興（ジュガール）>として想像するという、強力な言説を發達させていたのである」（p.221）。

二重取引を行う学生リーダーたちによれば、政府の役人や大学の教職員たちの「真のコラプション」と比べると、自分たちの行動は取るに足りないものであるという。学生リーダーたちは、自分たちのコラプションは、例えば「賄賂を支払う」ことに代表されるようなような、システムを動かすためのルーティーンワークに過ぎず、「賄賂を受け取る」役人や大学教職員のコラプションは詐欺行為であると、コラプションを道徳的に区別しているのである。にもかかわらず、コラプションに関与する学生リーダーたちは、結果的には個人的利益を得ているわけだが、著者は、こうした行為は学生組織での任期がわずか1年間であり、1年後には再び失業状態に陥る彼らの不安定な地位ゆえのことであると一定の理解を示している。このように、コラプションに着手することも一種の政治である。職にありつけないジャートの青年たちは、自らが有する資源を最大限動員して、創造的に生き延びていくのである。

本書の主たる登場人物はジャートの学生たちだが、ダリトのリーダーたちについても触れられている。元不可触民であったダリトは、どちらかといえば、キャンパス内の小さな政治に関心があるジャートと比較すると、より大きな文脈での社会変革に関心をもっている。だからこそ、ダリトたちは、右手でコラプションを批判し、左手で賄賂を受け取るような学生リーダーたちの行動を厳しく批判するのである。

このように本書は、下層ミドルクラスの男子学生たちが、周縁化された自らの状況をただ黙って受入れるのではなく、階級やカーストの枠を超えた連帯を作ってキャンパス内のコラプションとたたかったり、逆に、ローカルなコラプションのネットワークにおいて「フィクサー」となって暗躍したりして、階級の再生産に抗っている様相を生き生きと描いている。

なお、本書の原題は”TIMEPASS: Youth and the Politics of Waiting in India”であるが、この原題が表すように、まさにこれはインドにおける「待つ」ことをめぐる、若者たちのポリティクスを描いたエスノグラフィーである。翻訳に

あたって、訳者たちは、タイトルを「インド地方都市における教育と階級の再生産-高学歴失業青年のエスノグラフィー」に変更しているが、もしかしたら、多少意識を行ったり副題をつけたりして、原題をそのまま残した方が、このエスノグラフィーの魅力が伝わりやすかったかもしれない。

評者は、フィールド調査のために訪れたブラジルにて同書を読了した。政局の不安定なブラジルでは、インド同様にコラプションがしばしば起こるため、若者による抗議運動は日常茶飯事である。ブラジル各地においては、現大統領の汚職事件をめぐる、大統領の弾劾を求めるデモが繰り広げられる一方、弾劾に反対する人々のデモも同時に繰り広げられている。2014年のワールドカップ開催時と同様に、2016年のリオ五輪開催に対しても各地で反対デモが行なわれている。

またブラジルでは、近年、インドと同様に高等教育の大衆化が進行している。1990年以降、ブラジルでは実学を中心とする私立大学が急増したこととともない、大学卒業者の数も増加した。しかし、失業率の高いブラジルでは学歴インフレが進行しており、大学は出たものの、仕事が見つからない若者が少なくない。評者の主たる研究対象はブラジルの日系社会であるが、かつて日系人の多くはジャート農民と同じく地方で農業に従事していた。そして、子弟への教育投資と農業からの転換という戦略を通して我が子を専門職に就かせ、階層移動に成功した（ただし、日系人はコラプションとは無縁である）。しかし日系人も、ジャートやダリトの学生たち同様、アッパークラスとの間にガラスの天井の存在を感じているという。このように、評者は本書をブラジルのコラプションと社会運動、そして日系人の教育戦略を重ね合わせて読んだためか、評者にとっては大変身近なテーマであった。

ただ、すべての読者がコラプションや社会運動、そして階級や階層が顕著な社会を身近に感じるとは限らないし、インドの政治的・社会事情や教育事情に詳しいとは限らない。本書の巻末には、「訳者による解説コラム-本書を読むてがかりとして」が添えられている。本書の舞台となるメーラトの政治的空間について、そしてインドにおける階層的な教育構造について解説されており、評者もこの解説が参考になった。また、あとがきによると、原著では本文中に注記がわずか1点であり、図表もないとのことである。インド、さらには北インド

の地方都市や農村の事情に詳しくない読者にとって理解が困難であろうことを考慮して、訳出にあたっては、詳細な脇注が加えられている。こうした訳者の配慮によって、評者も最後まで読み通すことができた。しかし、本来なら、著者のジェフリー氏自身が、こうした解説がなくても様々な読者が容易に理解できるような記述を行うべきであろう。

とはいえ、本書は、著者自身がインドにて粘り強く「待つ」経験をしながら、若者たちとラポールを形成し、じっくり時間をかけて行った甲斐あって、短期間の調査では決して得られない、優れたエスノグラフィーとなっている。子ども社会学会の会員にとって、インドという国は必ずしも馴染みのある地ではないだろうが、一人でも多くの会員にこの本を手にとっていただき、本書の世界をじっくり堪能していただきたい。本評では、無料を承知でこの厚い記述を大幅に要約せざるを得なかったが、読書のための手がかりとなると幸いである。